

構造家・横山太郎

ロウファット! 脂肪も大事

朝倉幸子◎TH-1

illustration:Taco◎Switch・エンタテインメント

■横浜港大さん橋国際客船ターミナル

構造家の横山太郎さんは、15年間【構造設計集団(SDG)】に在籍した。担当したそれぞれの建物が大きかったので、「結局長い間いることになりまして…」と淡々と語る。その代表格が横浜港大さん橋国際客船ターミナル。コンペの在り方の斬新さや、勝ったのが新進気鋭の若いイギリスの設計事務所(f.o.a)だったことでも覚えている。何より、その建物に入ったら構造を知らない人でも「つくるのが大変だったろうな」と思うはず。構造設計の責任者だった横山さんが、その苦労をヴィヴィッド・テクノロジー(学芸出版社2007年)に書いている。意匠設計者と横浜市との微妙な温度差を埋める役回りを担ったくんだりや、施工側からのフィードバックを整合させる作業が大変だったところに興味を惹かれる。他の建物と同様に、つくるプロセスも考えなければならず、部材の長さや運び方などによってデザインが変わることもあったようです。

■ルーツは鉄骨業

横山さんは新規の設計図を見て、形態に関与するより、どうつくろうかということも同時に考える。これは鉄骨業を営んでいた家に育ったことが、根底にあるのか。一線を退いた父は、今も鉄骨の付帯工事のコーディネータ的立ち位置で仕事をしている。越後人ならではの忍耐強くて頼りになる人物像が浮かび、鉄骨業者となるともって頑固な父親のイメージだったが、鉄骨業を継ぐ気がないと判断した息子に「建築をやるなら構造をやったらどうだ」といつてくれたそうだ。将来意匠をするにしても「まず構造か」と、素直に選んだ。そして「現場で実際の骨組ができあがるのが面白くて、すっかりハマってしまった」のだった。所長の構造家・渡辺邦夫先生は、所員にさまざまなスタディをさせ、話し合いの中から構造システムや部材を決めていく。有無を言わさぬやり方ではないのだ



が、構造界に優秀な弟子を沢山輩出した、秘訣の一つなのかもしれない。横山さんも、常に自分のやりたいことと、所長がどう考えているのかという両方を考えていたそう。スタッフを抱える現在、師匠と同じスタイルを意識しつつ仕事をしているという。

■低脂肪はあまり美味しくない

ここ数年、マラソンに夢中という横山太郎さんは、朝方結構走っているそう。旅先でも朝のランニングは欠かさない。高じて、富士山を「ぐるり1周レース」に出るのが夢。トレイルランニングという中長距離走の一種で、舗装路以外の山野を走る競技。愛好者は遠い近いにかかわらず、色々な山々を訪れてのんびり楽しんでいるそうだ。

スリムな横山さんの体型を見て、走ることが好きと聞くと「なるほど、それでロウファット ストラクチュアか」と社名を連想する。が、そのネーミングには、横山太郎さんの深い想いが入っている。食べ物でも脂肪がないとあまり美味しくない。ある程度の脂肪は、健康にも必要で味にもかかわる。それは建築でも同じであろう、という考え。構造の材料強度など過去のデータや、単に安全率だけで判断するのは違うだろうと。建物をもたせるには、何処でさじ加減するべきか、それは構造家自身が判断して「脂肪」を残さなければ。全部そぎ落した建築が美しいわけではないからだ。

新潟から上京した当初、横山さんにとっては「大都会東京」であったはず。が、都下の色々な場所に住んだという体験と、最近では、自分の脚で走ることで「東京のどこかにいて、もし何かあっても、家まで走って帰れると思った」。

体験主義ともいえる特性が、横山太郎さんという力量ある構造家をつくったようだ。